

## 姫逃池の植生と水位回復工事前後の変化

島根県立三瓶自然館 井上 雅仁

三瓶山北麓に位置する姫逃池は、カキツバタの咲く風光明媚な池沼として知られている。しかし近年、著しい水位低下、池面積の減少、草本類の繁茂などが進み、池沼としての風景は大きく変化してきた。このような現況を鑑み、2002年から翌年にかけての冬季に、島根県によって池底部の堆積物の除去、粘土の不透水層の造成など、水位回復を目的とした工事が実施された。自然環境の保全や再生に関する事業では、事業自体の内容もさることながら、その後の変遷についてモニタリングを行い、その結果をもとに、より適切な管理を検討することも重要といえる。そこで本発表では、姫逃池の植生と工事前後での変化、これまでの水位変化と植生分布との関係について示した。

姫逃池に成立する植物群落の種類を知るために、2002年および2003年に合計85地点で植生調査を行った。得られた資料を整理した結果、11種類（下位単位を含む）の群落が認められた。これらの群落や水面の分布範囲を記録することで両年の植生図を作成し、各凡例の分布面積を測定した。2002年に最も広い範囲を占めていたのはススキ群落トダシバ下位単位であった。2003年には開放水面が最も広い面積を占めていた。分布面積の変化は開放水面で著しく、2002年にはみられなかったが、工事後の2003年には調査地の半分以上を占めていた。一方で、ススキ群落ヌカボ下位単位、アメリカセンダングサ群落、ススキ群落トダシバ下位単位では、大幅な減少がみられた。また、既存文献や過去の空中写真をもとに調査地各所が陸化した時期を求め、2002年の群落分布との対応について整理した。その結果、群落の種類によって陸化した時期が大きく異なることがわかった。これらの群落の配列は、水に浸からなくなったからの時間、すなわち各所の立地の乾湿に関係していると考えられた。

2003年には開放水面が調査地の約半分を占めていたように、工事の主目的であった水位回復については一定の成果があったとみられる。しかし、もともと水深の浅い池沼であり、今後も水生植物の分布拡大や池底への植物遺体の堆積が進み、湿原化や陸化が進行するものと考えられる。遷移の進行による湿原化や陸化と、池沼としての景観の維持という、相反する2つの現実には再び直面するであろう。このような状況を想定しながら、姫逃池の将来像を描き、適切な管理方法を検討していくことが求められる。

